

ヘミングウェイと頭部外傷⁽¹⁾

——伝記的事実を通じて頭部外傷とテキストとの関係を辿る——

坂 田 雅 和

【抄録】

本稿は、アーネスト・ヘミングウェイ（Ernest Hemingway）が遭遇した事故による頭部外傷と、その影響によって生まれた「奇妙な感覚」が、描かれた作品に潜むその内容に着目し、頭部外傷の影響がヘミングウェイの作品に深くかかわっている可能性を明らかにすることを目的とした。「奇妙な感覚」とは、慢性外傷性脳症・脳震盪後症候群の影響による頭部外傷の後に起こる、作品の中に現れる時間と場所の変容のことを表した。ヘミングウェイが体験した頭部外傷と作品に描かれた表現を、大きく3つの作品を中心に、体験した事実とそこに現れる表現を考察した。ヘミングウェイはその感覚が脳震盪の影響であること知り、その感覚が描き出す時間と場所が変容した光景を、作家の天賦の才能として作品を描いたと考えた。しかしながら更に作品に描かれた内容を考察すると、そこには既にヘミングウェイ自身も気づかない認知症の後遺障による影響が作品に現れていたと考えられる。

キーワード：ヘミングウェイ・頭部外傷・奇妙な感覚・慢性外傷性脳症・脳震盪後症候群

はじめに

2015年、一本の映画が公開された。その名は『コンカッション』（*Concussion*, 2015）。ウィル・スミス（Willard Carroll Smith Jr.）演じるナイジェリア出身の医師ベネット・オマル（Bennet Omalu）が、ナショナル・フットボール・リーグ（National Football League: NFL）を引退した後の2002年9月24日に、心筋梗塞で亡くなったマイク・ウェブスター（Michael Lewis Webster）の病理解剖をする。享年50歳であった。オマルはマイクの頭部の病理解剖から、フットボールの試合の最中の、頭部への激しいタックルが原因である脳の病気、慢性外傷性脳症（Chronic Traumatic Encephalopathy: CTE）を発見し、その詳細を論文に発表したのがあるが、NFLから全否定を受け、さらにさまざまな形で責め苛まれる行為を受け、一時は片田舎で住むことを余儀なくされる。しかしながら、その後オマルの研究内容は世間に認められることとなる。

ヘミングウェイは一般的にマッチョで冒険好きな作家として知られているが、その人生では数多くの事故や病気に遭遇している。また、その体験が多くの作品に描き出されている。最も大き

な事故として挙げられるのは、幾つもの作品に描かれている第1次世界大戦でのシェルショックである。そして、最後にして致命的となったのが、アフリカ旅行での2度にわたる飛行機事故である。実はその間にも過度の飲酒における交通事故や、天窓の落下を含めた大小様々な頭部外傷事故に遭っている。

第1次世界大戦中の1918年に体験した、ピアーヴェ川近くでのシェルショックから、1961年の自死に至るまで、多くの作品に医学的言及が描きこまれたのは、自身の体験にもよるものであるが、当時の医学の進歩を自分自身で体験したと離れては語れないであろう。現代の医療技術としてのCTスキャンやMRIは、普段の検診に日常使われているが、ヘミングウェイの生きた時代に、そのような細部にわたる検査機器はエックス線検査をのぞき存在しなかった。

ヘミングウェイの生涯は広く研究され多くの伝記に書かれているが、ヘミングウェイの頭部外傷が起因した精神的な外傷と作品に言及した先行研究は、作品の中のヘミングウェイの精神分析を取り扱ったものが中心となっていた。そうした中で2017年に新たに2冊の伝記が出版された。一冊はメアリー・V・ディアボーン（Mary V. Dearborn）の『アーネスト・ヘミングウェイ』（*Ernest Hemingway*, 2017）で、もう一冊はアンドリュー・ファラー（Andrew Farah）の『ヘミングウェイの脳』（*Hemingway's Brain*, 2017）である。ファラーは自身が脳神経科医という立場で、ヘミングウェイの生涯と病歴の研究に17年の歳月を費やし、アルコールの乱用などの伝記的事実を重視した、本格的に精神分析と作品に関する研究の嚆矢であると考えられる。

様々な事故に遭い、特に度重なる頭部外傷を経験したヘミングウェイと作品に描かれた頭部外傷に着目すると、作品はこれまでに解釈されなかったまったく新たな姿が浮かび上がってくる。シェルショックや事故における頭部外傷を描いているように見えるが、実はその背後にはヘミングウェイの経験した頭部外傷を原因として生まれた、例えば「奇妙な感覚」が大きく影響していると考えられる。「奇妙な感覚」とは、ヘミングウェイの経験した頭部外傷の後に起こる、作品の中に現れる時間と場所の変容のことである。その変容は短時間の場合もあるが、長い時間に渡る場合もある。エレン・アンドリュー・ノット（Ellen Andrews Knott）は、ヘミングウェイが1918年に負傷した時のことを書いた1959年の未発表の回想を引用し次のように考察している。

It is very bad for writers to be hit on the head too much. Sometimes you lose months when you should have and perhaps would have worked well but sometimes a long time after the memory of the sensory distortions of these woundings will produce a story which, while not justifying the temporary cerebral damage, will palliate it. "A Way You'll Never Be" was written at Key West, Florida, some fifteen years after the damage it depicts, both to a man, a village and a countryside, had occurred." ("The Art of the Short Story" qtd. in Flora Ernest Hemingway 138-39)

ノットは頭部外傷が生み出す可能性がある“sensory distortions”と言及し、これはニックのストーリーに特に関連があり、最近の科学的発見と一致している（Knodt 78）と言及している。本稿は、事故以前からヘミングウェイに訪れた「奇妙な感覚」が、描かれた作品に潜むその内容に着目し、頭部外傷がヘミングウェイの作品に深くかかわっている可能性を明らかにするものである。

慢性外傷性脳症について

ヘミングウェイの短編小説「格闘家」（“The Battler”, 1925）、長編小説『日はまた昇る』（*The Sun Also Rises*, 1926）、そして癒しの最終段階を描いた「誰も知らない」（“A Way You'll Never Be”, 1933）の3作品に描かれている「奇妙な感覚」に着目すると、実はその背後に潜むヘミングウェイが遭遇した事故で頭部外傷が深くかかわっている可能性が明らかになる。ガートルード・スタイン（Gertrude Stein）の言葉である「あなたがたはみんなロスト・ジェネレーションよ」という言葉が、エピローグとして描かれている『日はまた昇る』という作品の中で、自堕落な生活を送っているロバート・コーン（Robert Cohn）とのボクシングの闘いで描かれている「奇妙な感覚」。「格闘家」では、アド・フランシス（Ad Francis）が突然おかしくなり、ニック・アダムズ（Nick Adams）に暴力をふるおうとする場面を、「奇妙な感覚」に支配されたアドを第三者からの視点で描いている。そして、「誰も知らない」においては、全編に漂う時間と場所の変容が描かれている「奇妙な感覚」である。ヘミングウェイが体験した頭部外傷とこれらの作品との関係性について考察するにあたり、まず頭部外傷について現代の医学的見地を概観してみる。そうすることにより頭部外傷である慢性外傷性脳症（CTE）とヘミングウェイの体験した頭部外傷と作品との関係性がより明確になる。

前述のウェブスターは、貧困、認知障害、知的障害、人格障害、人格変化、記憶障害、気分障害、うつ病、薬物乱用、そして、ついには自殺未遂を企てた後、数年後に突然死亡した。解剖ではウェブスターの脳は、一見正常に見えた。最初、オマルはウェブスターの脳が、ボクサーで以前によく見られた状態である頭への繰り返しの衝撃、すなわちパンチドランク症候群（Punch-drunk Syndrome）によって引き起こされる認知症の一種にかかっていると疑っていた。まず、脳を固定して認知症関連の種々の蛋白について免疫染色を行った。検査を始めてから数か月後、免疫染色の結果を見てオマルは驚愕した。タウ蛋白陽性の神経原繊維濃縮体が脳皮質の広範な領域に認められたのである。一方、 β -アミロイドの集積も認められたもののその局在はアルツハイマー病のそれとは異なった。神経原繊維濃縮体の分布は、ボクサーに見られる脳障害（いわゆるパンチドランク症候群）と酷似し、頭部への衝撃（つまり軽度の脳震盪）が慢性的に繰り返されたことが病因である可能性が強く示唆された（李）。CTEの顕著な特徴は、タウと呼ばれるタンパク質の異常な形態の蓄積である。タウタンパク質は過剰リン酸化され（p-タウと呼ばれ

る)、脳細胞の構造と機能に重要な役割を果たすのではなく、有毒になり、最終的に細胞を破壊する (Stern 4)。

Tau tangles were kind of like sludge, clogging up the works, killing healthy brain cells-in this case cells in regions of the brain responsible for mood, emotions, and executive functioning. This was why boxers went crazy. This was why Mike Webster went crazy, too. (*Concussion* 124)

つまり、健康なニューロンにはすべてタウと呼ばれるたんぱく質が存在し、ニューロンからニューロンへ情報を伝達する神経セルが、脳に衝撃が与えられた後、タウたんぱく質は泥のようになり神経セルは死滅してしまうということである。ウェブスターの脳には、この泥のようなタウたんぱく質が数多くみられたのである。オマルがさらに脳を検査していくにつれて、さらなる脳損傷が明らかになった。CTE は脳震盪が唯一の原因ではなく、低レベルの半脳震盪的な怪我も原因であることがわかった。CTE はここ数年、脳震盪との関連で脚光を浴びている変性脳疾患である。その原因は、脳震盪等の比較的軽微な脳損傷を繰り返すことにありと考えられているのだが、これまでの報告例は、アメリカン・フットボールやアイスホッケーなどの、いわゆる「コンタクト・スポーツ」⁽²⁾の選手、あるいは、従軍経験のある兵士に限られてきた。従軍経験のある兵士は爆弾がさく裂した爆風で強度の脳震盪になるからである (李)。

またオマルは、27歳のイラク戦争での退役軍人の脳内でもCTEを発見した。その退役軍人は、心的外傷後ストレス障害 (Post-traumatic Stress Disorder: PTSD) にも苦しみ、後に自殺で亡くなった。ウェブスターの例が報告された2005年以降、CTE症例の蓄積が進み、「変性脳疾患」として認知されるようになった。映画でも描かれているように、オマルは2005年の *Neurosurgery* というジャーナルに、ピッツバーグ大学の病理学部門の同僚と共に、「ナショナルフットボールリーグプレイヤーの慢性外傷性脳症」という題名で論文を発表した (*Neurosurgery*, 128-134)。

「脳震盪等、比較的軽微な頭部外傷を繰り返すことが、行動の異常や人格の変化をもたらす変性脳疾患の原因となる」というCTEの概念が、ようやく医療の領域を越えて一般にもアナウンスされるようになったのは、2007年以降のことであった。2016年、アメリカ医師会は、CTEに関する研究に対して、オマルに最高の栄誉である Distinguished Service Award を授与した。CTEの「恐怖」を、アメリカ国民がどのように周知されたかということを如実に物語る発言が、ニューヨーカー誌の2014年1月27日号の記事で紹介された。NFLにおける脳震盪問題について聞かれた際に、「もし私に息子がいたら、プロ・フットボールはさせないだろう」と、CTEの「恐怖」を認めたのは誰あろう、米国大統領バラク・オバマ (Barack Hussein Obama II) だったのである。

「格闘家」

次にヘミングウェイの受けた頭部外傷について考察するにあたり、彼がいったいどれだけの回数の頭部外傷を受けたかを詳細に辿る。ヘミングウェイは思春期から成人期にかけて、男らしさをボクシングに証を求めていた。サム・ラングフォード (Sam Langford)、ジャック・ブラックバーン (Jack Blackburn)、トミー・ギボンズ (Tommy Gibbons)、そしてハリー・グレップ (Harry Greb) のような、伝説に残る有名なプロフェッショナルなボクサーとスパークリングの相手としていたことを鼻にかけていた (Lynn 59)。結果として、繰り返される頭部への殴打に耐え、軽微なものから厳しい頭部外傷による損傷があったことは容易に推測できる。

ヘミングウェイの人生を振り返ってみれば、様々なスポーツに満ちていると言えるだろう。ボクシング、カリブ海での釣り、アフリカでの狩り、スイスでのスキー、そしてスペインでの闘牛である。闘牛については『午後の死』(*Death in the Afternoon*, 1932) で書かれているように、70 枚の写真が掲載され、用語小事典や日程表までもが付いてあり、素晴らしい闘牛の解説書でもある。ボクシングについて書かれているものでは、ロバート・コーンとのやりとりが描かれている『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926)、『ニック・アダムズ物語』(*The Nick Adams Stories*, 1927) の中の短編小説「格闘家」や「殺し屋」("The Killers", 1927) などがある。

ヘミングウェイは出版されている幾つもの伝記にあるように、18 歳以降に数多くの事故に遭遇している。概観してみても、少なくとも 13 回の事故（うち、頭部外傷に限れば 12 回）に遭遇している。つまり彼の身体への負傷と頭部外傷は頻繁に繰り返され、損傷を受けていたのである。ファラーが 50 歳頃には脳細胞は回復ができないほど変化しており、遺伝子は時期尚早の衰えがプログラムされていたと考察しているように、すでに脳の衰退が確実となっていた (Farah 27)。

最初の重大な生命にかかわる頭部の損傷は、第一次世界大戦時に受けたものである。イタリアで赤十字の救急車のドライバーとして参加していた 1918 年である。6 月 22 日、前線に近いところで軍務についていた時である。彼はイタリア到着後、軍務について 1 か月以内で負傷したアメリカ人として歴史に残ったかもしれないが、実際にはエドワード・マイケル・マッケイ (Edward Michael McKey) が 6 月 18 日に犠牲になっていた (Farah 28)。最前線の部隊にタバコやコーヒーを配達していたまさにその時、地獄が出現した。オーストリア軍の迫撃砲弾が、ヘミングウェイのいた塹壕に打ち込まれたのである。その様子をヘミングウェイは後に、「溶鉱炉の扉が開いたようだった」と形容している (FTA 50)。外気がはっきりすると、金切り声とマシンガン掃射の音が聞こえてきた。つい先ほどまで隣で話していた兵士はすでに死んでいた。別の兵士は吹き飛ばされた自分の脚をつかんでいた。ヘミングウェイ自身も脚に砲弾の破片が突き刺さり出血していた。3 人目の兵士の体を肩に抱えて運んでいる間も、ゴム製の軍靴のブーツから血があふれ出していた。よろめきながら 150 ヤード (約 137 メートル) 先の赤十字の退避壕へと向かっていた。その途中、彼の軍服は担いでいた虫の息だった兵士の傷からの出血でさらに血まみ

れになっていた。そして退避壕へ着くなり倒れこんだのである。ヘミングウェイはそこで2時間ほど横たわり、赤十字の運転手によってフォルナーチ（Fornaci）にある救護所まで運ばれる途中、意識は薄れたり戻ったりを繰り返していた。

その後、ミラノ（Milano）の赤十字病院に入院する。『武器よさらば』（*A Farewell to Arm*, 1929）など幾つもの作品で、その状況に触れることになる。夏から秋にかけて、ミラノの赤十字病院でフォッサルタ（Fossalta）で受けた迫撃砲と機関銃の銃撃のため、237 か所から断片や弾の摘出をする手術を受けた。その爆発に遭った時の状況を要約すれば、「魂が口の中に飛び出してきて、気絶してしまった。呼吸が止まって死んだと思っていたら、やがて呼吸が戻ってきて生き返ったのだ」という状況だったようだ（島村、『ヘミングウェイ—人と文学』35）。

その7年後に発表された「格闘家」の中で、頭部外傷の影響について次のように語られる場面がある。貨物列車に無賃乗車をしているのをとがめられ、列車から殴り落されたニックは、痛む体をかばいながら、線路に沿って歩いていると、焚火をしている男に出会う。その男は元ファイターで、グロテスクな顔で外観を損なう肉体的な傷だけではなく気分や行動が恐ろしく暴力的で、すぐに暴力をふるおうとするのである。アド・フランシスというその男は「俺は気が狂っている」と話し、食事の準備中にナイフを貸さなかったニックに喧嘩をふっかけ、殴りかかってくる場面がある。しかし、すんでのところでアドとともに放浪生活をしているバグズ（Bugs）が、アドの後頭部を鯨骨でできた棍棒で後頭部を殴り気を失わせ、ニックは難を逃れる。

“Listen,” the little man [Ad] said. “I’m not quite right,”

“What’s the matter?”

“I’m crazy.”

He put on his cap. Nick felt like laughing.

“You’re all right,” he said.

“No, I’m not. I’m crazy. Listen, you ever been crazy?”

“No,” Nick said. “How does it get you?”

“I don’t know,” Ad said. “When you got it you don’t know about it. You know me, don’t you?”

“No.” (NAS 50, emphasis added)

さらに物語は続く。

The little man [Ad] looked down at Nick’s feet. As he looked down the negro, who had followed behind him as he moved away from the fire, set himself and tapped him across the base of the skull. He fell forward and Bugs dropped the cloth-wrapped blackjack on the

grass. The little man lay there, his face in the grass. The negro picked him up, his head hanging, and carried him to the fire. His face looked bad, the eyes open. Bugs laid him down gently. "What made him crazy?" Nick asked. "He took too many beatings, for one thing," the Negro slipped the coffee. (NAS 55 emphasis added)

アドは顔に傷を持つ元プロボクサーであるが、ただ傷があるだけではなくボクシングで脳をも損傷し、怒る理由がないにもかかわらず自制がきかなくなり、すぐに暴力をふるうのである。その場面は、ニックが語る自身に起こったことを描いたのではなく、ニックという第三者の視点を通して、脳に損傷を受けた人間が、自分が脳に損傷を受けた影響で行動していると知らずに行動する人間を、冷徹に事の推移を見ているのだ。

また、マイケル・レイノルズ (Michael Reynolds) はシェルショック後に、ヘミングウェイが故郷へ帰還した後、さまざまな文献に目を通し、自分に起こる症状を調べていた事を探し、その状況を当時の医学的知見とともに次のように考察している。

In the *American Medical Association Journal*, stacked in his father's office, he read about "shell shock," only they called it neurasthesia. Maybe he had neurasthesia. It was a hot item in the magazines. No one really understood it, but some of the vets had it. Even the Oak Park newspaper knew about shell shock. It said that laymen and professionals would be interested in the survey of vets being done by the Epiloptographic Society. It was a safe thing to be interested in. But the more Hemingway read, the less he thought that he had it. If he did, he did not have it bad, except a little maybe in the night. He would not tell his father about that either. Or anyone else just yet. A few years later when he invented Nick Adams, he gave him the shell shock. Nick would lie awake at night listening to the silkworms eat the mulberry leaves. Hemingway had heard the silkworms munch but that was before the was blown up in the night. He too had spent sleepless nights after the wounding, but he did not have in the way Nick would have it, nor as bad. (Young Hemingway 47)

当時は神経痛と呼ばれたシェルショックについて、ヘミングウェイは父の診療室に積まれていた医学雑誌に目を通していたのだ。シェルショックはまだ一部の人たちだけに知られ本当に理解している人は少なく、ヘミングウェイはいくら読んでも自分がそれを持っているとは思わなかった。万一持っていたとしても、夜に少しだけ症状が出ることを除けば悪い状態とは思わなかった。自分の頭がおかしくなったと思われたくなく、そのことは誰にも口を閉ざしていた。作家ヘミングウェイは、父であり医師でもあるクラレンス・ヘミングウェイ (Clarence Edmonds

Hemingway) の雑誌に丹念に目を通し、自分の経験とその結果に現れる症状について調べていたのだ。しかし、病を持った患者の多くがそうであるように、症状が出ていても自分はそうではないと思ひ込もうとしていたことが読み取れる。ただ、最もひどい症状である、夜眠れずにいつい眠ってしまうと、自分がこのまま死んでしまうのではないかという考えに取りつかれていたのだ。坂田はこの症状について、「身を横たえて」(“Now I Lay Me”, 1927) に描かれているように、ある晩砲弾に吹っ飛ばされ、魂が身体から抜け出して、いったん遠くに漂ってから戻ってきたのを感じて以来、暗闇の中で目を閉じて意識が薄れてゆくと魂が身体から遊離してしまうために眠りたなくなる。しかし light (光) があれば恐れることなく安心して眠ることができる と考察している (坂田 55-6)。ここではシェルショックによる後遺症 (PTSD) も描かれているのだ。アドと同様に、ヘミングウェイもいつか自分の脳がこのような形で永遠に変化し、それでもいくぶんかは洞察力があることに気づくだろう (Farah 4) とファラーが言及するように、この時期以前に既に自分の脳の変容に気が付いていたことがうかがえる。1929 年のオーウェン・ウィスターに宛てた手紙の中に、1919 年には脳震盪を起こしていた影響で寝ることができなくなったと告白している (*Letters* vol.3, 537-38)。作品はシェルショックから数えて 7 年後のものである。このシェルショック以降、約 15 年に渡り、時間と空間の変容である「奇妙な感覚」が作品に現れる。

『日はまた昇る』

1926 年に発表された『日はまた昇る』では、あたかもボクサーが頭部に強烈なパンチを受けたあとの様子が、ロバート・コーンとスパニッシュ・カフェでの殴り合いの場面で、次のように描かれている。作品は第一次世界大戦中のパリでの出来事である。アメリカ人の新聞特派員、ジェイク・バーンズ (Jake Barnes) は戦争中の負傷が原因で性的不能者となる。戦後の世界で価値観を見つけ出そうとしながら、自分の生き方を探っている。ジェイクはパリで、かつてボクシング選手だったロバート・コーンと出会う。ロバートはすでに妻と離婚して、事業も失敗した後、文芸評論もうまくいかずにパリにやってきて小説を書いている。ジェイクは戦時中入院していた病院の看護婦であったブレット・アシュレー (Brett Ashley) と成就できない恋愛に虚しさを感じている。そんな中、ジェイクとロバートが、仕事の帰りカフェ・スイゾでブレットのことで諍いを始める。その際、ジェイクはロバートのパンチを 2 度受ける。しかし、ここにはそれだけではないさらに深い意味が隠されているように思える。パンチを受けた後のジェイクの様子をみてみたい。

I swung at him and he ducked. I saw his face duck sideways in the light. He hit me and I sat down on the pavement. As I started to get on my feet he hit me twice. I went down

backward under a table. I tried to get up and felt I did not have any legs. I felt I must get on my feet and try and hit him. Mike helped me up. Some one poured a carafe of water on my head. Mike had an arm around me, and I found I was sitting on a chair. Mike was pulling at my ears. 'I say, you were cold,' Mike said.' (SAR 168)

ここでジェイクはロバートのパンチを2度受け、しばらくのあいだ意識を失っていたのである。いわゆるボクサーによく見られる状態である、頭への繰り返しの衝撃を受けたのだった。これこそがボクサーの経験する頭部外傷による脳震盪である。カフェで強烈なパンチを2度食らった後気を失い、正気を取り戻すのだが、その間に「奇妙な感覚」が訪れるのである。ファラーは脳科学者からの視点でヘミングウェイの脳機能について綿密に調べ、彼の脳にもボクサーの受ける数多くの強力なパンチや、フットボール選手が経験している頭部への衝撃が考えられると考察している。これがすなわちパンチドランク症候群と言われるもので、その頭部への衝撃によって引き起こされる認知症の一種である認知障害である（Farah 38）。ヘミングウェイの脳震盪の表現はこれで終わることなく、続くカフェからの帰り道でも「奇妙な感覚」が現れる。

Walking across the square to the hotel everything looked new and changed. I had never seen the trees before. I had never seen the flagpoles before, nor the front of the theatre. It was all different. I felt once coming home from an out-of-town football game. I was carrying a suitcase with my football things in it, and I walked up the street from the station in the town I had lived in all my life and it was all new. They were raking the lawns and burning leaves in the road, and I stopped for a long time and watched. It was all strange. Then I went on, and my feet seemed to be a long way off, and everything seemed to come from a long way off, and I could hear my feet walking a great distance away. I had been kicked in the head early in the game. It was like that crossing the square. It was like that going up the stairs took a long time, and I had the feeling that I was carrying my suitcase. There was a light in the room. Bill came out and met me in the hall. (SAR 170, emphasis added)

その喧嘩で受けたパンチによる脳震盪の影響で、ホテルに向かって歩いている時、突然まわりの様子が一変する。まるで高校時代に戻ったようで、試合で訪れた知らない街を歩き、遠くから歩いているような感じがしたり、自分の足音も遠くから聞こえてくるような感じがするのだ。意識と記憶は、試合が始まってすぐに頭を蹴られてから消失し、その後「奇妙な感覚」が訪れるのである。高校時代にフットボールで頭に受けた衝撃の影響で、時間と場所が変容する不思議な情景が浮かぶのだ。ファラーはヘミングウェイの治療の跡を綿密に追い、he was no stranger to

the bizarre sensory changes that can accompany a head injury. (Farah 40) であると考察している。つまり、ヘミングウェイはその「奇妙な感覚」が脳震盪の影響であること知り、その感覚が描き出す時間と場所が変容した光景を、作家の天賦の才能として作品を描いたのではないか。『日はまた昇る』が出版されたのは1926年であるから、ヘミングウェイにはその年までに、既に幾つかの後遺障があったと考えられるのである。

「誰も知らない」

2度目に頭部に大な損傷を受けたのは、パリ時代の1928年3月4日のことである。2度目の妻との生活の最中であった。「ヘミングウェイ天窓の落下事故で切り傷を負う」と、ヘラルド紙はヘミングウェイの事故を伝えた。パリのヌイイ (Neuilly, Paris) にあるアメリカの病院の関係者によれば、ヘミングウェイは自宅で日曜の朝、昨日取り換えられた天窓が落下し、頭部の内側に3針、外側に6針の傷を負ったということだった。天井からガラスが落ちてきて頭部の左目からわずか2インチのところに深い傷ができた。シェルショック以降にヘミングウェイは、自分の顔を流れる血の匂いと外科医の治療中に、そんなに大量の血が流れるのを見たことはなかった。イタリアでオーストリア軍の迫撃砲で受けた右ひざの負傷とブーツを満たした血を見た夜以来のことである。彼はショックで目が回る中、友人のアーチ (Archibald MacLeish) に、その夜、全速で走るタクシーの中で、後ろに血のしずくが垂れるほど濡れている男とまるで再び救急車に乗ったように、血がどんな味やにおいがしたかを説明しようとしたが、すべて間違っていたことがわかった。病院にある鏡に映ったその見知らぬ男の顔は、あまりに白くて自分自身だとは思えなく、彼の頭を巻いている包帯は、戦時中ではなく一般市民となった現代では大きすぎた (Reynolds, *Homecoming* 166-67)。また、ヘミングウェイは自分は事故に逢いやすいというわけではないと後述しているが、ちょうど「異国にて」を書いている最中のことだった (Baker, *Life* 287-88)。

3度目の事故は、2年後の8月22日、モンタナ州で乗馬中、急に暴れ出した馬にまたがったまま降りる機会を失い、繁みの中で腕と脚を怪我し、頭部に衝撃を受け顎の左側に深い傷をおった。その縫合で顔が歪んでしまった (Baker, *Life* 324)。4度目の頭部への衝撃を受けたのは、ドス・パススと10日間のハンティング旅行の後の、1930年11月1日だった。対向車のヘッドライトに目がくらみ、車が道路わきの水路に突っ込む交通事故で右腕に大けがを負った。5度目の事故は第2次世界大戦中の1944年5月25日 (前日午後10時頃から飲酒) で、ロバート・キャパの自宅でのパーティーの帰り、早朝、灯火管制が敷かれて真っ暗な中、運転を誤りスチール製の給水タンクに激突した。ヘミングウェイの両膝はダッシュボードに当たりひどく腫れてしまった。彼の頭は1928年以来2度目になる病院の救急処置室に連れていかれることになった。浅いところではきれいに裂けていたが醜く長く深い切り傷であった (Reynolds, *Final* 94)。そして

重度の頭部外傷を受け、頭は約2時間半かけて57針縫うこととなった。その影響で何か月にもわたりひどい頭痛が続いた。その頭部外傷による脳震盪のため、アルコールを禁じられていたにもかかわらず、ウィスキーを飲み続けさらなる頭痛に悩まされた（Baker, *Life* 596）。次の大きな事故は前の事故から3カ月も経過していない同年8月5日に起きた。キャパ（Robert Capa）と同乗中に、ヘミングウェイの3ヤード前方のドイツ軍の砲撃を避けようとして、車が側溝に突っ込み頭を石に打ちつけたのである。キャパによれば、ヘミングウェイが瀕死の重傷だった時、ドイツ軍ではなく、キャパが有名な作家の死体の最初の写真を撮るために待機していたことにたいそう腹を立てたということだった。

In Capa's words, Hemingway "was furious. Not so much at the Germans as at me, and accused me of standing by during his crisis so that I might take the first picture of the famous writer's deadbody." (Capa. *Slightly* 166)。

ヘミングウェイはこの事故で死の淵を覗いたのであるが、頭部外傷の後遺症である、物が二重に見える視覚障害、記憶障害、言語障害などが顕著になった。その6年後、ヘミングウェイはチャールズ・スクリブナーズ（Charles Scribners）に宛てた書簡で、その時の様子を戦車の砲撃が私を持ち上げて頭から落としたと述べている。（*Letters* 723）。

1933年、ヘミングウェイは戦争経験を「誰も知らない」で、癒しの最終段階として描いた。その作品は、主人公のニックが自転車に乗ってパラヴィチーニ隊長が指揮をする大隊が駐屯しているところへやってくるところから始まる。ニックは、米軍が来ると思わせるために、米軍の軍服を着ている。パラヴィチーニ隊長ととりとめのめない会話の最中、Nick remembered suddenly and completely. (CSS 309) とあるように、ニックは突然フラッシュバック⁽³⁾で、あの時の記憶が完全に思い出したのだ。あの時の記憶とは、This was not as large a dugout as the one...because of a house and a long stable and a canal? (CSS 310-11) とあるように、作者ヘミングウェイが実際に体験した、オーストリア軍の迫撃砲弾で被弾したものに他ならない。ニックがパラヴィチーニ隊長の勧めで、テントの中の寝棚で横になった時、その情景が生々しく一連の状況が思い出されたのである。

, but those were the nights the river ran so much wider and stiller than it should and outside of Fossalta there was a low house painted yellow with willows all around it and a low stable and there was a canal, and he had been there a thousand times and never seen it, but there it was every night as plain as the hill, only it frightened him. That house meant more than anything and every night he had it. That was what he needed but it frightened him especially when the boat lay there quietly in the willows on the canal, but the banks

weren't like this river. (CSS 310-11 emphasis added)

あの時の記憶が完全によみがえったのは砲撃の恐怖だけではなく、黄色く塗られ長い厩を備えた一軒の家と、何千回も行ったのに、その運河を見たことがなかったからである。そして、その運河は目の前のこの川のようにではなく、見たこともない不思議な運河の恐怖が混じりあうのである。思考が現実に戻った時、周囲を見回すと皆がじっと自分を見ていることに気付くのである。再び横になると、次によみがえる記憶は戦闘ではなく、長い厩を持つ黄色い家と運河で、戦闘よりも恐怖となり汗だくで目が覚める。パラヴィチーニの指揮する大隊本部の寝棚に横たわっている最中に、記憶の中でその混沌とした時間と場所がさまざまに変容している。再び思考が現実に戻り目を覚ましたニックは、戸口で自分を凝視している副官、通信兵、そして二人の伝令の顔を見返した。つまりここから導き出されるニックの状態は、静かにベッドに横たわっていたのではなく、大声を出していたのか、あるいはあたかも悪夢に苛まれているような様子で誰もが気づくようだったと推察される。

ニックに突如あの時の記憶が完全によみがえったのだが、その記憶の中に、…*it was that started them.* (CSS 310) とあるように、その被弾の時以来、*them* がニックに起こり始めたのだ。まず始めは、*He felt it coming on now.* (CSS 311) の *it* が示す内容である。その内容とは、“*I am demonstrating the American uniform,*” から始まり、*That is all, gentlemen. Good-day,*” (CSS 312) で終わる、長尾が考察しているイナゴとバッタに関してのとても長い話である（長尾 51）。ニックの様子があまりにも奇妙なので、副官は二人の伝令に少佐を捜すように命じたのである。現れたパラヴィチーニ隊長もニックの様子がおかしいのを察し、再び横になるように勧めた。二人の会話の最中、また同じような状況が起こり、*He felt it coming on again.* (CSS 313) とあるように、再び *it* が現れるのを感じたのである。*He was trying to hold it in.* (CSS 314) 一度は抑えようとしたのが、*He knew he could not stop it now.* (CSS 314) 抑えることができなかった。その内容とは、*He shut his eyes.* で始まり、*yellow house with a low stable and the river much wider than it was and stiller.* (CSS 314) とあるように、再び被弾したあの時の記憶がよみがえり、前述の恐怖の二つの *it* と混じりあい、総体である *them* が起こり始めたため記憶が混沌となるのである。しかしながら、ニックが最後にパラヴィチーニ隊長に話をしている中で、“*I'm all right now for quite a while. I had one then but it was easy. They're getting much better. I can tell when I'm going to have one because I talk so much.*” (CSS 314) とあるように、自分がおかしくなることがあるということを認識していることがうかがえる。それでも *it* には抵抗できない。*it* の総体である *them* とはまさしく、ヘミングウェイ自身が経験したシェールショックの頭部外傷による PTSD に他ならない。

ヘミングウェイは自身の戦争体験を次のように語っている。1949年11月、リリアン・ロス (Lillian Ross) とのインタビュー記事で、『ニュー Yorker』に掲載されたものである。

“I can remember feeling so awful about the first war that I couldn’t write about it for ten years,” he said, suddenly very angry. “The wound combat makes in you, as a writer, is a very slow-healing one. I wrote three stories about it in the old days – ‘In Another Country,’ ‘A Way You’ll Never Be,’ and ‘Now I Lay Me.’” (Ross 18)

戦争がどれだけ作家に深い傷を与えるかということについて、この作品以前では全く触れてこなかった。戦争で傷を負ったヘミングウェイ自身が語るように、戦争から受けた心の傷を癒すのはとても長い時間が必要だったということである。ヘミングウェイがこれまで描くのを避けていた被弾の瞬間にまで迫り、そこから派生した深刻な精神的外傷を、赤裸々にニックの幻覚の中に炙り出したからである（島村、『ヘミングウェイを横断する』66）。つまり書くことによって癒されたことだった。この作品では、従軍経験のある兵士に見られる、明らかな頭部外傷を受けた後の状態が描かれている。すなわち「誰も知らない」というこの作品は作者ヘミングウェイが被弾の状況を書くことによって癒されたのであるが、終始シェルショックによる頭部外傷（脳震盪）と PTSD に苛まれた物語であると考えられる。

更なる頭部外傷

1945年6月20日、7度目の事故を起こす。ヘミングウェイは4人目の妻になるメアリー（Mary Welsh Hemingway）がシカゴへ向かうために飛行場へ運転の途中、車が道路でスリップし、側溝を飛び越え立ち木に激突したのである。その事故でヘミングウェイは頭をバックミラーに強打し、ハンドルで肋骨を4本折り、左膝を割ってしまう。これも飲酒運転の末の事故だった（Reynolds, *Final* 131-32）。8度目の事故は1950年7月1日。ピラール号の濡れた甲板で足を滑らせ大きな材木に頭を強く打ちつける。頭に手をやると手は血で真っ赤に染まった。偶然近くにいた別の船に乗っていた医師により三針で傷口を塞げたが、深い裂傷で骨にまで達する傷だった（Baker, *Life* 738）。9度目は1953年10月、「ルック」の編集長のビル・ロー（Bill Lowe）と10日間ほど狩りをしていた時のことだった。急カーブを曲がっている時、ヘミングウェイはランドローバーから転落して顔面を切り、肩をねん挫した（Baker, *Life* 788）。車から転落したのち、肩をねん挫し顔に裂傷を負ったというこの事故の様子からうかがえることは、頭部への強い衝撃（顔の裂傷）、すなわち脳震盪だったと考えられる。

10度目と11度目の事故は最も深刻な頭部外傷であった。1954年1月23日、2度にわたるアフリカでの飛行機事故で頭部を含む全身に怪我をする。旅行中の体験した1度目の事故は、突然黒色と白色のトキの群れが飛行機の行く手を遮り、それを避けようとしたパイロットは飛行機を急降下させた。その際、峡谷の上に張られてあった古い電線に機体を接触させてしまい、藪の中につっこんだ。かろうじて着陸には成功したが、ヘミングウェイは背骨、右腕と右肩をひどく打

撲し痛みが続いた。おそらくこの事故においても状況から、頭部への衝撃があったと考えられる。翌日に起こった2度目の事故は1度目の事故の後に乗った飛行機が、整備されていない穴だらけの滑走路からの離陸に失敗して停止し炎上して爆発したのだ。その際のヘミングウェイは頭から出血して漿液が流れ出し、右腕は脱臼し、全身打撲、肝臓、腎臓と脾臓の破裂、左眼の一時的失明、背骨の故障、左足の捻挫、顔、腕と頭の第一次火傷、そして視力にも障害を受けたのである。これが、ヘミングウェイが最後にして最も深刻な脳震盪事故となったのである (Reynolds, *Final* 272-74)。12度目の事故は、同年2月2日、釣りに出かけた時、雑木林で発生した火事を消そうとして火の中へ飛び出していったのだが、先のアフリカでの飛行機事故で体の動きがままならなかったで、つまづいてしまいそのまま炎の中へ倒れた。助け出された時は、着ていた服から煙がくすぶっていて、第二次火傷（火ぶくれ程度）を脚、腹部、胸、そして唇に、第三度の火傷（黒こげになる程度）を左手と右腕に受けていた。この時の事故においても状況から何らかの衝撃が頭部にあったと推察できる。

まとめ

1950年代の医学は、「脳震盪後症候群」(Post-concussion Syndrome: PCS) をまだ定義していなかったが、頭部外傷がさまざまな神経学および精神医学的症状を引き起こす可能性があることはよく知られていた。病状は変化し、時間とともに断続的になるのである。一般に患者の年齢が高いほど、脳の回復力が弱くなり、症状が重くなり、長く持続する。典型的な例として、いらいらと気分のむら、記憶と集中力の欠如、騒音と光過敏、めまい、疲労、耳鳴り、不眠症、判断障害である。ヘミングウェイは、これらの脳震盪後のさまざまな時点で、上記のすべてを有していた (Farah 36-37)。このようにヘミングウェイは度重なる脳震盪をおこしているが、急性期から引き続き起こる脳振盪後症候群があり、これらの病態は軽症頭部外傷を繰り返すことによって発生するリスクが高くなるといわれているものと、スポーツ選手や軍事活動に従事する兵士のように、軽症頭部外傷を繰り返し受傷した人たちが、受傷から数年後に慢性的な認知機能障害や抑うつ状態を呈することが報告され、繰り返される軽症頭部外傷に関連する慢性外傷性脳症がある (宮内 191, Farah 39)。

ヘミングウェイの受けた頭部外傷は、まず急性期の PCS で、後の度重なる事故で CTE に移行したと考えられる。個人の脳は個別であり、治療により解決される場合とそうでない場合がある。何年も症状を抱えている理由はわからない。回復のパターンはほとんどないが、高齢で脳震盪に苦しむ患者と非常に重度の頭部の外傷を負った患者は、一生神経障害を持っている可能性が高くなる。CTE は、ヘミングウェイが経験したような脳震盪による損傷だけでなく、複数の「閾値以下」の脳外傷、つまり、脳震盪を引き起こすほど強力ではないが、それでも損傷を与える多数の打撃から生じる可能性があるというファラーは考察している (Farah 39)。

『ニック・アダムズ物語』の中の「格闘家」, 「誰も知らない」, そして『日はまた昇る』が書かれたのは, ヘミングウェイが遭遇した度重なる大事故の最中である。作者ヘミングウェイは, 頭部外傷に伴う「奇妙な感覚」を知らぬ人ではなかったということである。その「奇妙な感覚」を天賦の才能であると確信して, そのことを自分のものにして描いていたのであるが, 彼は度重なる頭部への怪我を伴って, 次第に贈り物としてのそれが, 実際に CTE の後遺症である「奇妙な感覚」の変容と自身の PTSD には気づいていたが, その先に進んだ認知症には気が付かなかったのである。

注

- (1) 頭部外傷の主な外傷としては, 脳震盪・脳挫傷・急性硬膜下血腫・慢性硬膜下血腫・急性硬膜外血腫・外傷性クモ膜下出血・頭蓋骨骨折等がある。また重症頭部外傷の多くは, これらの複数が併存する。
- (2) 体と体が接触する機会が多いスポーツのこと
- (3) 映画で, 物語の進行中に過去の出来事を挿入すること。回想を表現するための技法のこと。

Works Cited

- Baker, Carlos. *Hemingway: Ernest Hemingway: A Life Story*. NY: Scribner's, 1969.
- Capa, Robert. *Slightly Out of Focus*. Pickle Partners Publishing: 2015.
- Dearborn, Mary V. *Ernest Hemingway: A Biography*. New York: Alfred Knopf, 2017.
- Farah, Andrew. *Hemingway's brain*. Columbia, University of South Caroline, 2017.
- Flora, Joseph M. *Ernest Hemingway: A Study of the Short Fiction*. New York: Twayne, 1989.
- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Scribner's, 1987.
- . *Death in the Afternoon*. 1932. New York: Scribner's, 2003.
- . *Ernest Hemingway Selected Letters 1917-1961*. Ed. Carlos Baker. New York: Scribner's, 1981.
- . *A Farewell to Arms*. 1929. New York: Scribner's, 1969.
- . *The letters of Ernest Hemingway: Volume 3 (1926-1929)*. Eds. Rena Sanderson, Sandra Spanier, and Robert W. Trogdon. New York: Cambridge UP, 2015.
- . *The Nick Adams Stories*. Ed. Philip Young. New York: Charles Scribner's Sons, 1972.
- . *The Sun Also Rises*. 1927. London: Arrow Books, 1994.
- Knod, Ellen Andrews. "Toward a Better Understanding of Nicholas Adams in Hemingway's 'A Way You'll Never Be'" *The Hemingway Review* 35.2 (Spring 2016): 70-86.
- Laskas, Jeanne Marie. *Concussion*. UK: Viking, 2016.
- Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. New York: Simon and Schuster, 1987.
- Omalu, Bennet. *Neurosurgery*, Volume 57, 2005. 128-134.
- Reynolds, Michael. *Hemingway: The Final Years*. NY: Norton, 1999.
- . *Hemingway: The Homecoming*. NY: Norton, 1999.
- . *The Young Hemingway*. NY: Norton, 1998.
- Ross, Lillian. *Portrait of Hemingway*. New York: Simon & Schuster, 1961.
- Stern, Robert. *Written Testimony of Dr. Robert Stern*. Boston Univ., 2017.
- 坂田雅和「ヘミングウェイ作品の "Now I Lay Me" における作家としてのニック・アダムズーニックの眠りとトラウマ」(『融合文化研究』第 24 号, 国際融合文化学会, 2017 年) 36-45 頁。
- 島村法夫『世界の文学 ヘミングウェイー人と文学』, 勉誠出版, 2005。
- . 「ヘミングウェイと戦傷という病ー精神的な外傷と癒しのメカニズム」(『ヘミングウェイを横断す

- る：テキストの変貌』日本ヘミングウェイ協会編，本の友社，1999年）55-70頁。
- 長尾晋宏「大きな二つの心臓のある川」再読——「黒いバッタ」と「茶色いバッタ」（『ヘミングウェイ研究』第12号，日本ヘミングウェイ協会，2011年）47-57頁。
- 宮内 崇，他『軽症頭部外傷に関連する病態と対応』，日救急医学会誌，2014，191-200頁。
- 李 啓充「続アメリカ医療の光と影第261回米スポーツ界を震撼させる変性脳疾患（1）『週刊医学界新聞』第3060号，医学書院，2014年」（http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA03060_04. Accessed, 10 Jan. 2020）.

（さかた まさかず 佛教大学総合研究所特別研究員）